

よか NET ネット

No.78 2005. 11
(株)よかネット

NETWORK

住民参加による“筑後川流域まるごとインターネット博物館”の実証実験
—NPO筑後川流域連携倶楽部の“まるごと博物館”が、
都市再生モデル事業で— 2

福祉のまちづくり整備基本計画に基づき
順次バリアフリー整備が進められている山田市 6

見・聞・食

できることは自分たちの手で少しづつつくっていききたい
～春日まちづくり支援センター「ぶどうの庭」～ 8

建設業者が農業へ参入
雇用の安定を目指す大口市の取り組み 10

まち歩き

西新で歴史探訪と買い物を楽しむ
～第5回福岡・博多まちあそびの会～ 11

近況

柳川でどんこ船の船頭体験 12

留学生の就職事情 13

就農準備校で野菜づくりとネットワークづくり② 14

月心寺の精進料理 14

韓国の仏教を、智異山松廣寺、実相寺、華嚴寺で感じる 15

韓国宿坊体験記 16

●鮮度がいい情報満載の『地域まるごとネット博物館』

三連水車の水の音



昇開橋から見える生の夕日



つけもの自慢



小鹿田の唐臼の音



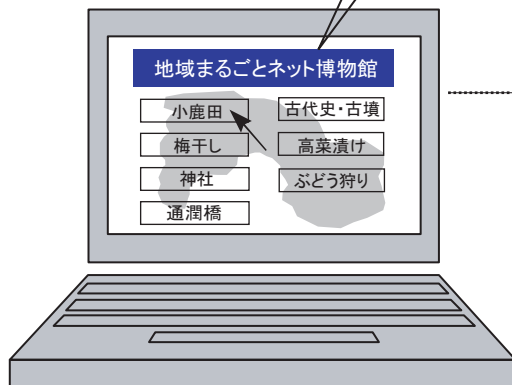
地元の人がそれぞれマイクとカメラをセット

リアルタイムの映像と音

あらかじめ撮ってセットされている写真や資料映像

カメラの向こう側の人との対話
お気に入りの商品の注文
問い合わせや相談
本日の行事

試しに小鹿田を
クリックしてみる...



住民参加による"筑後川流域まるごとインターネット博物館"の実証実験

NPO筑後川流域連携倶楽部の"まるごと博物館"が、都市再生モデル事業で

糸乗 貞喜

地域の人々の心のこもった、情報満載の博物館を作りたい

秋晴れの朝。こんな日は「洗濯日和というのかな」と思っていると、ついつい、小鹿田の天日乾燥の風景を思い出した。焼き物の里小鹿田(おんた)では、今でも轆轤で形作ったものを、板にのせて家の前の庭中に広げ、天日乾燥をしている。途中にわか雨でも来ようものなら、家中総出で、板にのせたものを家の中の棚にしまう。

「ちょっと小鹿田を覗いてみるかな」と思って。パソコンに向かう。

“筑後川まるごと博物館” “小鹿田”

日曜日の朝、NHKラジオを聞いていると、「音の風景百選」の中でも人気の高い小鹿田の唐臼の音を、アンコールしているのを聞いたことがある。今ではそれが音だけでなく風景も含めて、唐臼のゆったりとした動きと、水が注がれている有様、“ギギー”ときしんで“ドーン(トーン)”という音とともにみることができる。

「ウーン、小鹿田も天気はいいな、この分だとよく乾くな」

「ちょっと、ひとつ走り行ってみるかな。坂本茂木さんや山のそば茶屋のおばあさんに会えるかもしれないし、そばも食べたいし」



轆轤でつくったものを天日乾燥している風景がリアルタイムでみれる。

と、というようなことが、筑後川流域一帯でできるとおもしろくなる。パソコンで覗くことができれば、行ってみたくもなるのが人情だ。

小鹿田では、すでにこの仕組みができています。

残念ながら、カメラを年中セットしているわけではないので、リアルタイムの映像や音が、常に見えるようにはなっていない。現在は、記録されている映像と音が見聞きできる。地元にカメラとマイクのセットをしてくれる人がいると、リアルタイムに、夜中でも“音の風景”を聞くことができる。

住民がつくる“深みがあって、鮮度のいい博物館”の仕組み

パソコンで“筑後川まるごと博物館”を検索すると“まるごとネット博物館センター”がでる。そこで“神社”をクリックすると、高良大社をはじめ、筑後川流域の神社が検索できる。神社の項には資料映像があり、年中行事はもちろん、本日の予定・一週間の予定行事、たとえば菊花展などもわかる(あらかじめインプットしておく)。

“梅干し”をみると、大山町(日田市)の梅干し名人のおばあさんが「梅干しの作り方のカンドコロ」を教えてくれる。

“高菜漬け”をみると、我こそはという自慢名士が、たとえば田主丸(久留米市)のTさんが、うんちくを書き込んでいる。ついでに、「今年のブドウは上出来です。ブドウ狩りには〇月〇日から〇日頃にどうぞ……」などとも書いている。Tさんがサテライト局になってカメラとマイクをセットしてくれると、リアルタイムの風景はもちろん、Tさんと会話も楽しめる。

サテライト局になってもらえると、高良大社でも、梅干しや漬け物でも、同じことができる。当然、漬け物や梅干しの注文をすることも、受けることもできるようになる。Tさんところの柿やぶどうを友人に送ろうと思ったら、Tさんが出て

いる見本映像を見て、宅急便で送ってもらうこともできる。

“古代史・古墳”などを引くと、吉井町の装飾古墳の珍敷塚(めずらしづか)古墳が出てくる。古墳内部の映像を見た後、「案内」をみると「内部を見たい方は、〇〇さんの家でカギを借りてください」とも書かれている。

また、“やまづとの道”を検索すると、地域の個人美術館が多数あらわれ、その内容や開館予定が見られる。

このネット博物館は、今現在のことも、何百年前のことも、数千年前にもたどることができるし、問い合わせや、相談もできる。

黒川温泉の予約状況や天気(リアルタイムの映像でもわかる。つまり“筑後川まるごとネット博物館”は、流域のことは何でもわかるし、地域内部の情報交流のセンターになっていく。

それどころではない。

東京やアメリカにいる息子家族・孫などと、まるごと博物館サテライトに登録している柳川のおじいちゃん・おばあちゃんの家とが、顔を見ながら話をする事ができる。このシステムは、まさに筑後川流域の内部はもちろん、外とをつなぐ巨大なネットワークになっていく。

“博物館行き”にならない博物館をつくりたい

「博物館行き」という言葉がある。これは「もう役に立たなくなったモノやヒト」の意味で、少し揶揄している言葉である。博物館の本来の意味は、「悠久の時を重ねた文物から、人々が学ぶ場」ということで、最も重要な施設を表している。

しかし何となく「古い文物」というイメージがある。博物館は、博物学という学門がベースになっているからだ。それは鳥獣の剥製や岩石などを研究し、分類整理して陳列したりする学問であるので、避けられないことではある。従って、博物館はリピーターが少ないので、経営に苦しむことになる。

最近、日経新聞に「ミュージアム 『民』 参入の行方」という連載が載った(10月10、12、13、14日)。この内容は、博物館の経営が行き詰まっていること、指定管理者制度の導入で、経営改善できないか、指定管理者制度のもとで、民間企業が、学芸員を1年単位で雇用して運営している(応募してきたのは若い研究者や学生だった)、



朝倉町の三連水車がまわる映像にあわせて、リアルタイムに水の音も聞こえる。

NPOに運営を任せられないか、民間などに委託したのでは、文物の寄贈者らの理解が得られるのか、企画の工夫で入場者は1.5倍になった、

民営委託では、運営機関の期限があるわけで、コレクション収集は無理ではないか、民間では、保険料や保管コストが大きすぎて、採算に合わないのではないか、などである。

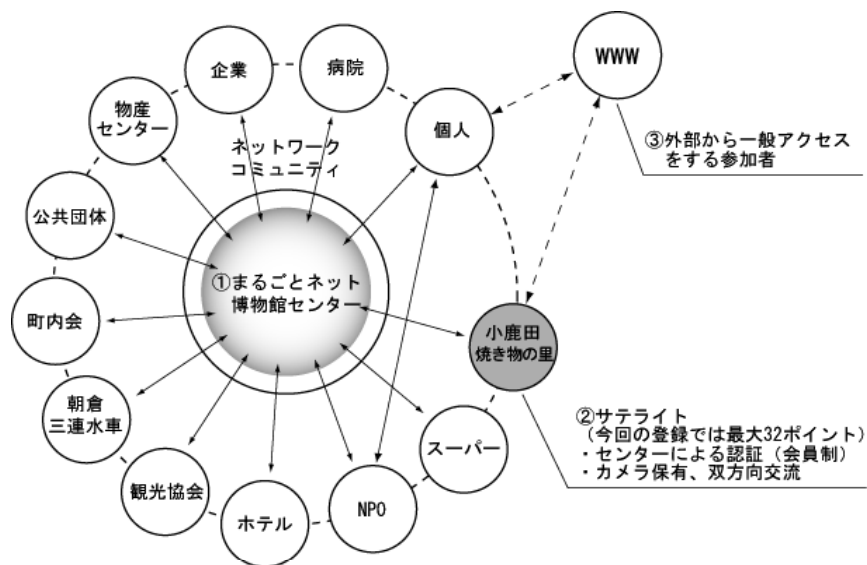
ここでは、正面からふれられているわけではないが、博物館が「高価で、保管費用のかかるモノ」に、経費がかかる仕組みになっていることが問題なのであろう。この問題をそのままにして、採算性とか、経営問題とかいう話の先は見えてこない。つまり、「ハコモノの中に、高価で有名なモノを買わねばならず、保管費用のかかるモノを見せること」をベースにした博物館は、“絶滅危惧種”かも知れない。最近のデータを見ても、決して景気がよくないことが表れている。

入館者数は、90年代始めから減り始めているのに、博物館は99年でも増え続けている(これが日本統計年鑑では最新資料)。これは、バブルの頃に計画し、出来る頃にはブームがすぎているという、よくある事例かも知れない。

日本の博物館の数と入館者の推移

年	博物館数	年	入館者 (百万人)
1963	294	1962	48
1968	338	1967	58
1971	375	1970	
1975	409	1974	94
1978	493	1977	98
1981	578	1980	116
1984	676	1983	109
1987	737	1986	120
1990	799	1989	130
1993	891	1992	134
1996	985	1995	124
1999	1045	1998	113

入館者は90年から減少しているが、博物館は99年でも増え続けている。



知的ネットワークシステム

地域博物館の未来は？

地域博物館は、本来その「地域の“博物”を研究したり見聞きたりして、そこから地域文化を学ぶ場」ということであろう。とすれば、過去の文物を見るだけでなく、現在とどうつながっているかが分かることは、大切だということになる。そもそも地域博物館は、「住民が世界中の文物を、その地域に集めておいて、そこで勉強するところ = モノ集め施設」なのか、「住民も参加して、地域の文物や文化を、学び深め、世界中へ発信するコトをするところ」なのか、どちらに比重を置かが問われると思う。例えば、九州の博物館が、アジアとの文化交流としての宗教を取り上げる場合を考えて見よう。伝教大師最澄が帰り着いたところとして福岡県新宮町の「独鈷寺」、中国から持ち帰った法灯の火が今も続いている「千年家」は欠かせない。しかしその独鈷を博物館に持ってきたり、千年家の火を移したりしても意味がない。それよりもインターネットで見ることができたり、現地で直接見せていただく方法などが分かるようなガイドがあればよい。そこまで分かると興味のある人は必ずでくる。

また、臨濟宗の栄西禅師が茶の木を持ち帰った話の場合、平戸説、福岡市北崎説などがあるが、茶の木を持ち帰ったのか、茶の文化を持ち帰ったのが判然としない。このような問題は、断定することに意義があるのではなく、興味を喚起することが必要ではなからうか。とすれば、脊振山系にある多数のツバキ科の植物を見れば、元から九

州の地に自生していたのかも知れないという疑問が起る。こんな場合には、脊振山系の自生するツバキ科の植物を、インターネットで照会すれば面白い。

空海は博多、松浦の田浦を経て入唐し、坊津に帰ってきたとされている。九州で空海のことを考えると、肥前国松浦郡田浦や坊津が何処にあって、今どうなっているかということに興味をわく。ここがリアルタイムに覗けないだろうか。

実は、九州国立博物館の企画についてお手伝いしていたとき('96~'99年頃)、カメラと音声の発信が出来るネット博物館システムを作って、少なくとも博物館に来た人は、リアルタイムの映像が覗けるようにすると楽しいということ、空海を例をひいて提案してみた。目的と違ったらしく全く取り上げられなかった。今回の“地域まるごとネット博物館”のコンセプトは、当時考えていたことと全く同じである。

住民がつくる“地域まるごと博物館”の仕組み = 身軽で高品質の文物に恵まれるネット博物館こそ、博物館経営改善の決め手

ネット博物館はハコモノをもたない。情報を入れるインターネット上の入れ物(サーバーといっている)を借りればよい。今回の実験システムは、次のような関係者で成り立っている。

本部機能として、まるごとネット博物館センター = 1

正会員として、センターから認証を受けてネットワークでつながるサテライト=32

外部から一般アクセスをする参加者

まず、博物館センターがシステムの調整やマネジメントをし、日頃から流域内の情報蓄積を行い、年中無休でオープンする。その内容には、取りあえず次のようなものが考えられる。

ア、地域の史跡・遺跡などのデータ蓄積と整理

イ、地域の祭りなどの取材と紹介

ウ、方言の、使われ方の情景や音声による蓄積・整理と紹介

エ、文化としての生活習慣情報の蓄積・整理と紹介

オ、言い伝えなどの地域伝承の蓄積・整理と紹介

カ、伝承文芸(ムラの物語)などの発掘・整理と紹介

キ、料理などの発掘・整理と紹介

ク、保存食などの発掘・整理と紹介

ケ、得意技を持った人や面白い人の発掘と紹介

コ、地域のイベント情報の整理と紹介 など

正会員によるサテライトは、リアルタイムの情報源・発信源になる。正会員になるには、少し容量の大きい(リアルタイムの通信ができる)パソコンを持って、“まるごと博物館の倫理規定”を認める誓約をして、認証番号をもらう(まだ、ここまでシステム構築はされていません。こんなことをするために実験中なのです)。現在用意しているのは32ポイントであるが、将来は筑後川流域内で数百、数千ポイントになると考えている。つまり、個人はもちろん、町内会や集落に、商店街やスーパーマーケットやコンビニに、地域内の事業所や官公庁に、観光協会や物産センターに、公民館や病院などが想定される。

この正会員は一般には無料であるが、発信機能を使って広告宣伝に使う場合は、センターに使用料を払う有料会員になる。これによる収入が、将来の“まるごと博物館”の運営資源になる。従って、マネジメントのポイントは、センターが魅力のあるコンテンツを提供しながら、使用料を払う正会員をどれだけ広げるかにかかっている。

なお、ハコモノは持たないと述べたが、人々の交流やしやべり場になる機能は欠かせないので、そのような機能を置きやすい施設(住宅、ビルなど)の寄付行為による財団法人などと連携して、広告収入や会議室利用料などで運営できるようにしたい。

また、コト情報重視といったので、文物軽視のように感じられたかもしれないが、文物の購入予



昼間の昇開橋。夕方は絶景となる。

算を持たないという弱点を逆手にとって、地域の美術品などの所有者の協力を得て(この場合は無料の正会員サテライト)、ネット公開をしていただくと同時に、公開日を決めて見せていただくことをお願いする。これは“まちかど見世の間博物館”のネット版である。

リアルタイム情報による“鮮度”こそが、リピーターの拡大と情報の拡充の源泉

センターや正会員によるリアルタイム情報は、同時に情報ストックになってゆく。この仕組みでは、日常の活動が日々の情報拡充につながる(高価なモノを買う予算はないが、内容の充実は進む)。

この正会員が広がると、蓄積情報が豊かになり、リアルタイム情報が増え、ネットを覗いた人の地域への来訪も増えることになろう。つまり、この「知的ネットワークシステム」こそが、地域文化はもとより、地域の産業の振興・活性化のカギになるに違いない。

たとえば 農村集落正会員のサテライトでは、大都市に出ている出身者と“ネット端会議”が始まる、町内会のサテライトでは、遠方の出身者などとネット端会議ができる、正会員が同意をする場合は、出席できなかった人とネット交流をしながら一杯酌み交わして盛り上がることができ、

孤立化しやすい高齢者にとっても、知的情報による刺激だけではなく、縁籍者からのアクセスによる“様子見サポート”が受けられるし、孫の顔などを見ることもできる、商店街や観光協会にとっても利用価値が高いし、コンビニなどでも「今日の弁当コーナー」などをリアルタイムで繋いでおくのと販促活動につながる、もちろん 地域

の多くのNPOにも参加していただきたい。

このようなネット博物館があれば、日常生活まで便利になり、住みやすい地域づくりにつながってゆく。是非成功させたいと思っている。

今までの活動と、今後の予定

第一回の実験は、8月6日に、“焼きものの里小鹿田”をベースにして久留米や福岡、東京の全国まちづくり大会の新宿屋台村とをつないで行った。第二回は、福岡県朝倉町の“三連水車”をベースにして行ったが、連携ミスで上手くいかなかった。第三回は、福岡県大川市で、筑後川の“昇開橋にかかる夕陽”をねらって11月14日の14時から19時の間に行う。大潮の干潮時の満月近くの時間をねらって行うので、上手くいけばなかなかの見物になると思う。

是非成功させて、将来の見通しをつけたいと思っている。 (いとりのり さだよし)

福祉のまちづくり整備基本計画に基づき順次バリアフリー整備が進められている山田市

山田 龍雄

福岡県では、ノーマライゼーションの理念に基づき、誰もが社会生活をしていく上で障害(バリア)となるものを取り除いていこうという考えから、平成10年4月に「福岡県福祉のまちづくり条例」を策定した。この条例を推進していくため、県内の市町村を対象に、「計画づくり」や「事業化」に対して、県単費の補助をつけている。このため、毎年、県内2～3箇所の市町村が計画づくりをしているようだ。

当社がお手伝いした山田市では、平成14年度に



アリーナの下を見下ろせない観覧席

基礎調査を行い、平成15年度に委員会を立ち上げ、計画づくりを行った。調査から計画づくりまで約2年近くをかけている。平成16年度からは「整備基本計画」に基づき、逐次事業化を行ってきている。そこで調査・計画づくりで感じたこと、事業化の内容について報告したい。ちなみに山田市は来年の4月から、1市3町(山田市、嘉穂町、稲築町、碓井町)の合併によって嘉麻市(かまし)となる。

公共建築物は、10数年前までバリアフリーという設計思想はなかった。

今回、調査した対象エリア内には市役所、市民センター、サルビアパーク(イベント・集会・スポーツなどのメイン会場となるアリーナと温水プールとの併設の施設)など、多くの公共建築物が集積している。この中でもサルビアパークは平成5年建設と、エリア内では新しい施設であった。

この建物を調べたとき、本当に「この当時にはバリアフリーという設計思想」が全くなかったことを改めて認識させられた。一応、小生も建築学科を卒業しているが、設計の前提条件にバリアフリーという思想を教えてもらった記憶はない。

サルビアパークの調査で発見した、バリアフリー思想の欠落の具体的な事項としては次のようなものがあげられるが、本当に信じがたいものもある。

サルビアパーク(従前)

- ・図面上、アリーナ2階に障害者用の観覧スペースが明記されているが、実際に車いすに乗って観覧してみると、腰壁が高すぎて、まったく下を見降ろすことができない。
- ・車いす利用者が温水プールの観覧席へ行くためには、アリーナ内にあるエレベータに乗って2



渡り廊下の出入口には10cm程度の段差あり、腕力のある人しか渡れない。

階の渡り廊下から行くこととなっている。しかし、肝心の渡り廊下の出入口には10cm程度の段差があり、車いす利用者はよほど腕力のある人しか渡れないようになっている。

- ・もし、車いす利用者が渡り廊下を渡れたとしてもプールの観覧席（プール棟の2階にある）は、1m程度床下にあって階段を降りないと観覧スペースに行けなくなっている。

（整備後）

- ・平成16年度より事業費の補助もつけられ、整備計画にもとづき徐々に整備がなされている。
- ・年度毎の補助金が限られていることから、市としても優先度の高いところから整備している。
- ・腰壁を切り下げ、転落防止の手摺りを設置し、車いす利用者がアリーナ1階の全体を見渡せるようになった。

児童福祉センター内の保育園（従前）

- ・この建物は、昭和63年に建設され、学童保育所と保育園が併設されている。3年前、園長さんにヒアリングを行ったとき、ちょうど下肢に障害のある児童が入園していた。園長さんは「洋式トイレがないので自力でできない」「玄関口にはスロープなし」「廊下には手摺りはなく、障害のある児童は腰壁づたいに歩いている」など、非常に利用しづらいことを言われていた。
- ・表玄関側にはスロープが設置されているのはあるが、保育園入り口には設置されていなく、1箇所でも設置していればよいといった設計思想であったと思う。
- ・たまたま下肢障害の児童が入園したから、利用しにくさが露呈してしまった感があるが、やはり元々バリアフリーの思想で設計・施行しておかないといけな建物であった。

（整備後）

- ・廊下に手摺りを設置し、また壁際に置かれている障害物を取り払い、誰もが手摺りをたたって歩けるようにした。
- ・トイレの床面を上げて出入口との段差をなくし、スムーズに移動できるようにした。また、和式便所から洋式便所に交換、障害児対応のトイレ設置、小便器への手摺りの設置など園児が利用しやすくなった。
- ・実施後の利用状況について園長さんに聞いてみると「既存建築物の改修という制約の中での回



腰壁を切り下げアリーナを見渡せるようになった。



保育園のスロープのない玄関口



手すりのない廊下で障害児が壁やテーブルをつたって歩いていた。



手すりをつたって歩いていけるようになった。

修工事であったのでスペースの問題もあったが、すべての便器が洋式に交換されたので、今では健常児も障害児用も楽しそうにトイレを利用しています」との感想も聞かれた。

市役所は改善中

当初、山田市には鉄筋コンクリートの近代的な建物がなかったせいか、非常にモダンに感じられたものだ。しかし、既に30年近くを経過しているため、今では利用しづらい面も出てきている。市役所でのバリアフリー上の問題としては次のようなことがあげられた。

市役所の裏側に多目的トイレを増設しているが、トイレまでの案内板、車いす利用者の誘導ブロックは設置されていない。さらに裏側の玄関口のドアは開き扉であり、車いす利用者は一人では開けられない。車いす利用者はトイレを利用するのに、介助が必要だし、自力で利用しようと思うと市役所の裏側に回ってしか利用できなくなっている。

3階建てであるが、エレベーターは設置されていない。

カウンター下の奥行きが狭く、車いす利用者が近づきにくい。 等

なお、市役所は今年度補助を受け、階段手すりの設置、障害者用トイレへの誘導ブロックの設置及び開き戸を改善中である。

歩道は車優先での思想であり、水平に歩けないとことが多々ある。

調査エリア内で、生涯学習館が建てられている前面の道路は、以前は多くの石炭や人々を運んだ国鉄上山田線であった。この幹線道路は平成8年に整備されたものであるが、この歩道の一部には、歩道の横断勾配が10度以上となっている箇所もあり、非常にきつくなっている。これは、道路から



トイレも洋式にとり換えてある。

出入りする車が底を打たないように、車の出入りを優先しているため、歩道をスムーズに歩かせるといった人間を優先する思想が欠落している。この道路などは最初から道路の計画高を少し高くしておき、宅地との差を極力小さくするようなことができなかったかと思う。

車の出入りのため、歩道が頻繁に切り取られ、全く平面が連続した歩道になっていないところは全国各地にみられるが、やはり車優先の思想からの設計が間違っていると思う。

事業費の関係もあり、合併後に山田市が「福祉のまちづくり整備基本計画」に基づき、どこまで整備ができるのかは定かではないが、少しでも整備が進み、誰もが使いやすい施設になっていくことが期待される。 (やまだ たつお)

できることは自分たちの手で少しづつ
つくっていきたい

～春日まちづくり支援センター「ぶどうの庭」～

愛甲 美帆

9月末、福岡県春日市の方から、30年間使われた保育所が移転したため、その建物を活かした春日まちづくり支援センターが10月にオープンするという案内をいただいた。事前の施設見学会に伺い、その経緯とセンターの雰囲気がとても素敵だったのでオープンから2週間ほどたち、改めてセンター長の片島さん、事務長の中嶋さん、スタッフの日田さんに取材をさせていただいた。

センターを訪れる前は、元保育所の雰囲気を活かした暖かい雰囲気がある中に、きれいな椅子や机が並んでいる様子を想像していたのだが、その予想は見事に外れた。

市民参加のワークショップで構想を練る中で、運営団体「みらい・かすが」が生まれる

このセンター設立に向けて、市では約1年半前より、市民団体、自治会や一般市民など30名が参加したセンター設立準備委員会でどのようなセンターがよいかワークショップで話し合いを重ねてこられた。

当初センターの運営は、公開コンペで決定することとなっていた。当初、委員会では、センターで何をしたいか、どのようなサービスが欲しいかというコンセプトからルールづくりまでを考えるということだった。しかし議論を重ねていく中で、

「自分たちが願うセンターの機能と収支を考えるとコンペ方式では、欲しいサービスが得られないのではないか」、「準備委員会から新たに運営準備委員会を発足させ、市に運営プランを提案していったらどうだろうか」などの意見が出た。そこで新たに運営準備委員会として、これまでのメンバー以外にも参加者を募り、運営について検討していくことになった。これが現在センターを運営している任意団体「みらい・かすが」の始まりである。

改修は最低限。できることは、自分達の手で。

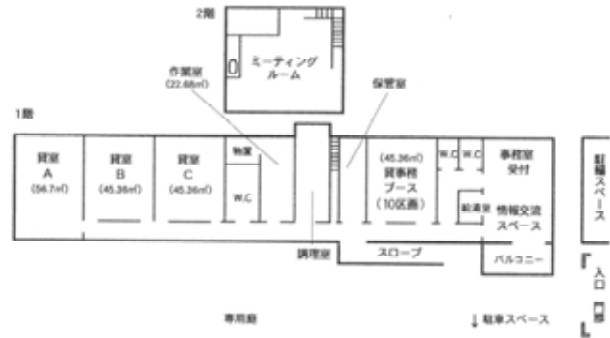
センターは、園児用の手洗い場やキャラクターシールが貼ってあるなど、園舎の暖かさがそのままの“手づくり”あふれる場所であった。

施設は、「活動・作業の場所提供」「交流ネットワークワーキング」「活動支援」「情報収集・情報発信」「人材のマッチング、コーディネート」という5つの機能を持ち、1階の事務室と情報交流スペース、3部屋の貸室(約14坪~17坪)と貸し事務ブース約14坪(10区画)、調理室、保管室、2階のミーティングルーム(一般貸し出しは準備中)からなっている。利用については、春日市住民に限っておらず、また、NPO、市民団体だけでなく、公益性のある活動の場合は企業でも個人のサークル活動でも利用できる。また、料金を負担すれば、作品等の展示・販売をすることも可能となっている。

予算の関係もあり、改修を業者に頼んだのは、入り口のスロープの取り付け、子供用のトイレから大人用・身障者用への変更、事務スペースの配線工事等最低限となっており、備え付けの棚をぶどう色にぬったり、壁を白くするペンキ塗りから、建物の掃除、草刈り、部屋の表示(現在、パソコ



「この建物の雰囲気は何かできるという気分させてくれる」と言われていた。



ぶどうの庭の平面図

ンで打ち出した紙を貼っている)などは運営団体「みらい・かすが」のメンバーの手によって行われ、また、備品についても、ほとんどがリサイクル品で、リサイクルセンターやどこかで不要品が出ると聞くと、もらいに行って集めているそうで「掘り出しものの情報があったら教えてください」と言われた。

2週間後、改めて伺うと、窓ガラスには、目隠しのレースシートを貼り付けてあり、他にも「つい先日工事が終わって警備がついたんですよ。やっと事務室のパソコン側のカーテンが片方ついて。」というお話や「3室のうち2部屋は冷暖房がつけられず、今年はストーブで対応するんです」と、大変だけど楽しそうに話されていた。

部屋を結ぶ廊下には、このセンターの名前である、ぶどうの木がもともと植えてあり、伺った時は房がいくつかぶら下がっており、いただくとは本当にみずみずしくておいしかった。「ぶどうの庭」という愛称は、このぶどうのように、多くの人たちの「思い」と「笑顔」がつながる場になりたいという意味が込められている。園庭であった場所には、中央に大きな桜の木があり、春にはとても見事な桜が咲くそうだ。



事務室で唯一新品はパソコン。境界印にはマイクスタンドを活用。「マイクは無いけど、スタンドがあったから…」とのこと。

将来は常駐スタッフの時給を捻出できる運営を目指している

センターの開館は、9:00～18:00（予約をすれば、21:00まで利用可）で毎週水曜日が休みとなっており、18:00までは基本的に常駐スタッフが1人いる。運営費は市からの維持費と貸し室料（9:00～18:00まで、貸し室2時間半400～600円、調理室1,600円。18:30以降貸し室1時間200～400円、調理室1,000円。貸し事務ブース月10,000円。冷暖房費1時間100円。登録団体は半額、企業は倍額）等からなる。維持費の使い方は現場にある程度任せられており、水道費や光熱費以外の清掃などの費用を自分たちが行うなど工夫して、常駐スタッフ1人の時給を捻出したいとのことで、18:00以降の管理は、現在はボランティアだそうだ。

オープンして2週間しかたっていないが、現在、貸し付けブースは高齢者や障害者の生活支援を行っている団体で1区画埋まっている。また、11月から定期的な貸し室利用も埋まりつつあるそうだ。

私が取材した日は、親子リズム教室が1室で行われていた。貸し事務ブースが埋まれば、固定収入が増え、もう1人分の費用が出せそうだがということであった。

センターは、隣接する福岡市に最も近い北部の住宅地の中に位置している。市内全域からの交通の便利がいいところにあるわけではない。センターの方は、まずは、利用している団体を通して、いろんな人にこの場所を知ってもらうこと、また立地から考えてこの地域に密着した活動も行っていきたいと言われていた。

さらに、現在、「みらい・かすが」には30数名の会員がいるが、中には別の団体の代表も兼ね多忙な人が多いことから、今後はここでの企画や利用する団体を通して、このセンターの運営に参加できる人を募っていきたいということであった。

個々の思いをつなぎ、次世代に伝えていきたい。

センターのオープン日は、担当の地域づくり課の課長補佐さんがこのセンターのキーワード（ひと・情報が）「ひらく、たまる、つなぐ」を入れて作詞作曲した「ぶどうの庭で会いましょう」という歌を披露されたそうだ。その歌詞を大きくして壁に貼るのを市にお願いしたところ、文字だけでは寂しいからと地域づくり課の方が絵を書いて横に飾られた。

最後にセンターの方々の思いを伺った。「当初はもっときれいに渡してくれるものだと思っていた。だけど、自分たちでできることはやっていこうと思う。」「昨年のお話の時は、はじめは週に2日のペースで開けてもいいのではという意見も出ていた。少しずつ理解してもらって参加者が増えていったらと思う。」「春日市はもともといろんな活動が盛んだったが、なんとなく互いの様子を知らずともつなげる場所がなかった。特に福祉分野以外の団体はそうだったと思う。ここができたことで、市民のネットワークづくりができるのではないかと。また、春日市は転勤で人の出入りが多いまちなので、市役所に行くほどではないけど困ったことを相談できる窓口になったらと思う。」と話された。

お話を伺っていると、市民も行政もそれぞれができることを持ち寄って、楽しみながら、少しずつつくっていき、まちへの思いを次世代につなげていきたいという思いが伝わってくる。

公的な施設であるが、活動も設備もできることから、やれる人が、少しずつということが印象的であった。もと保育所という場の雰囲気と、思いを持ったメンバーのもと、これからその輪がどのように展開されるか楽しみである。

（あいこう みほ）

建設業者が農業へ参入

雇用の安定を目指す大口市の取り組み

雪丸 久徳

7月より、八女市で雇用創出の調査に係わっている。その中で、鹿児島県大口市の建設業者が農業に新規参入して、遊休農地を活用したウメ農園や、さつまいも栽培を行って、地域の雇用づくりに取り組んでいると知り、9月7日、台風が九州に上陸した直後に、はるばる現地まで話を聞きに行った。

大口市は鹿児島県の北部にあり、熊本県境に位置している人口約22千のまちで、福岡市からは、新幹線、レンタカーを乗り継いで3時間程度かかる。大口市に着くと、大口市地域振興課の橋本さんと伊佐地区産業活性化協議会事務局の中村さんが快く対応してくださった。

建設業者が農業へ新規参入した話について聞くと、大口市では公共事業に依存してきた建設業が、

ここ数年の公共事業の急激な削減で、経営や雇用が厳しくなり、そんな中で新分野へ進出する企業が出始めたということだ。実際には、農業生産法人以外の法人の農業参入を可能とする農業構造改革特区（リース特区）を取得し、その制度を活用して農業参入を果たしている。8つの建設業者がそれぞれ梅農園、甘藷栽培、観光農園（さくらんぼ、ブルーベリー、自然レストラン、ダチョウ飼育、農産物栽培）、特産品加工に取り組んでいるとのことだ。

建設業者が農業へ新規参入するに至った流れを簡単にまとめてみた。

まず、地元の建設業者が、この厳しい経営、雇用状況を取り切ろうと、新規事業（農業への新規参入）へ向けて動いていた。

これまでバラバラの動きをとってきた市、農協、商工会等の10団体がまとまり、産業活性化協議会を立ち上げ、大口市全体の産業活性化に向けて連携した。

この産業活性化協議会が、建設業から農業への参入の動きや、地域の雇用創出へ向けた今後の取り組み等を取りまとめ、雇用創造効果の高い事業に取り組む市町村等への支援事業「地域提案型雇用創造促進事業（通称パッケージ事業）」（厚生労働省によるコンテスト方式の事業）に応募した。

パッケージ事業に採択され、新規参入者等への能力開発の支援を行えるようになった。

パッケージ事業というのは、構成労働省が雇用機会が少ない地域において、雇用創造に自発的に取り組む市町村や、経済団体などから構成される協議会が提案する事業の中から、コンテスト方式で雇用創造効果が高いものを選抜し、当該協議会にその事業実施を委託する事業のことで、年間最大2億円、3ケ年間事業で、地域の取り組み、課題、事業内容、費用対効果によって採択が決まる。

大口市では、このパッケージ事業を活用して新分野に係わる技術者の養成（県内外研修）や、人事・労務管理面での改善をはかるための「農業・新規参入の中核的人材育成講座」等を行っている。

実際に、建設業から農業へ参入し、梅農園を経営しておられる愛高梅園の乙津氏に話によると、地元の農業高校から新卒で雇って、それから一年間剪定等の技術研修に和歌山県の梅農園に送り出

しているそうで、その受け入れ先の費用等を支援してもらっているとのことだ。

大口市では、昨年行った「サクセスセミナー」という講座の延長で、今では自主的に「サクセス会」といった意見交換、アイデアを持ち合う相談の場が月一回行われている。大口市は、50～60代を中心に産業活性化に向けた自主的な動きが生まれており、このパッケージ事業という支援が有効に活用されていると感じた。

農業への新規参入の話は、農業の担い手不足をどうするかといった話と関係が深く、今後の動きが興味深い。大口市の今後の経過については機会があれば報告したい。（ゆきまる ひさのり）

西新で歴史探訪と買い物を楽しむ

～第5回 福岡・博多まちあそびの会～

原 啓介

前回、まちあそびの会は、企画委員会を立ち上げ、参加者がそれぞれアイデアを持ち寄り、新しい遊びを考えていく体制になった。今回は企画委員会で出されたアイデアで、西新元寇防塁跡 高取焼き味楽窯見学 紅葉八幡宮 西新商店街 わらじやというコースを楽しんだ。

西新は元寇の古戦場だった

西新防塁跡は今宿や生の松原などと比較すると小規模だが、西新一帯は文永・弘安両役の戦場になったところらしく、防塁以外にも元寇に関係したものが残っている。当時は海岸線沿いに20kmも築かれていて、西新の防塁はそのほんの一部で、この辺りが昔の海岸線だったらしい。

高取に残る唯一の窯元、味楽窯を見学

元寇防塁から15分ほど歩くと、高取焼き味楽窯



西新元寇防塁跡。発掘作業には西新小学校の生徒も参加したらしい。



味楽窯敷地内にあるのぼり窯。亀井さんは、今でも火をつければ立派に使えるとおっしゃっていた。

がある。ここは美術館を併設しており、館内で先代（14代）の亀井又生庵さんに高取焼きの歴史や味楽窯についてのお話を聞いた。高取焼きは、文禄・慶長の役の際、朝鮮からキムチの壺をつくる陶工を連れて帰ってきたのが始まりと言われ、もともとは直方の鷹取山にあったが、現在の高取に移ってきたのが1720年頃とのこと。また、亀井家の敷地内には、のぼり窯がある。この窯は昭和53年ころまでは現役で動いていたらしい。亀井さんは、「昔と違って周りにマンションが建ち並んだ。今は登り窯は動いていないが、火を入れた場合、火事と勘違いされたり、煙が迷惑だという苦情がくるでしょう」とおっしゃっていた。現在はガス窯で焼いているそうだ。

西新商店街は活気に溢れていた

味楽窯の隣にある紅葉八幡宮に行った後、西新商店街へ行った。ここは通りの両側の商店と、産地直送の野菜やくだもの、漬物などを売る「リヤカー部隊」が共存し、名物になっている。私も、参加者と肉まんをかじったり、たこやきをつつきながら買い物を楽しんだ。

わらじやで自然薯料理を楽しむ

最後に自然薯（志摩町に7反の農地を借りて育てている）と魚料理の店“わらじや”に行った。自然薯を色々な料理にして出してもらったが、なかでも“宇宙むかご”というむかごの化け物には皆さん驚きの声を上げていた。これをチップスにしたものは、とても美味かった。今回のまちあそびの参加者の方々は、お酒が好きな方が多く、次回以降のまちあそびの話や焼酎の話など、様々な話題でいつも以上に盛り上がった。



宇宙むかご。その名の通りの迫力。人の拳ぐらいの大きさはある。

西新は色々な楽しみ方ができるまち

西新は歩いて回れるエリアに史跡・遺跡の他にも趣のある古い建物が数多く残っており、それらを結ぶ間には、活気のあるリヤカー舞台や若者の洋服屋などがある。西新は色々なパターンのまち歩きができる場所だと実感した。

今回は、2月に博多に残る唯一の造り酒屋「博多百年蔵」と「博多新劇座」での大衆演劇を楽しむ予定にしているので、参加されたい方はご連絡ください。（はら けいすけ）

所員近況

柳川でどんこ舟の船頭体験

中秋の名月の9月18日、柳川市の「水の会」が主催する観月会に参加した。水の会は、柳川の掘割および矢部川流域、有明海の水文化に関する研究活動や浄化・保全活動を行っている団体で、観月会は今回で4回目になるそうだ。以前、メンバーの方に、「観月会に来れば、どんこ舟の船頭ができますよ」というお誘いを受けており、是非参加したいと思っていた。

当日は3隻の舟が出ていた。夕方に集合したのだが、あいにくの曇りで月は出ていなかった。舟の上でぼんぼりに灯りをつけ、月見団子やうなぎなどの料理とお酒を食べながらゆったりと川下りを楽しんだ。そうこうするうちに雲間から月が出て、参加者から歓声があがった。

集合場所に戻るとき、船頭体験をさせてもらった。それまでは、水の会のメンバーが舟を漕いでいたのだが、皆さん経験があり、なかなかお上手。私はどんこ船に乗るのは今回で2回目、船頭をさ

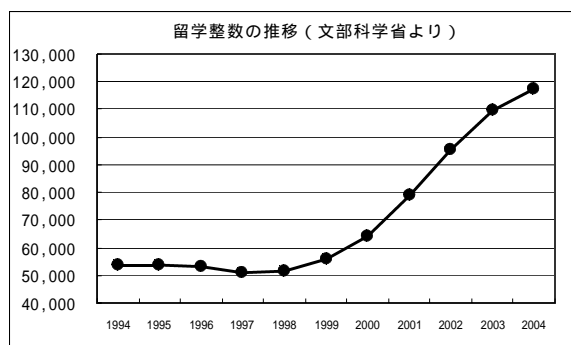
せてもらうのは初めての体験だった。どんこ船の漕ぎ方は、棒で川底を突いて船を前に押し出すのだが、やってみると難しい。棒が川底の泥にとられ、あやうく川に落ちそうになる。水に落ちた場合に備えて着替えを持参することもチラッと考えたが、まあ大丈夫だろうと持ってきていなかった。かなり真剣に漕いだ。しかし、船はまったく進まない。方向を修正しようとする、逆方向に曲がりすぎ、川岸にぶつかってしまう。モタモタしていたら、船頭を交代させられてしまった。

今回、観月会というイベントに参加することで、どんこ船を漕ぐ体験ができた。どんこ舟はどこにでもあるものではないし、珍しい体験をさせてもらった。また、中秋の名月のもと、水の音とぼんぼりの灯りにつまれた素晴らしい雰囲気の中で、お酒をいただきながら他の参加者との交流を広げることができた1日となった。(原 啓介)

留学生の就職事情

9月25日の日曜日、留学生を対象とした合同就職面談会「九州キャリアフォーラム2005・秋」が天神で開催された。九州・西日本の留学生を対象とした地域企業との面談の場づくりによる就職支援のために福岡県や九州経産局が実施しているものである。小生がお手伝いしているNPO活動の事業の一部として、NPO会員企業に呼びかけ、人材の発掘と同時に留学生のニーズを知る機会でもあったため、理事長をはじめと数人の理事が留学生との面談の場に臨んだ。

1983年当時、1万人だった日本への留学生を、時の首相であった中曽根氏の一声で、留学生10万人の受入計画が政策として始められた。10年後の1993年に5万人を超えたものの、その後起こったアジア通貨危機の影響で、2000年頃まで留学生は5~7万人で推移していた。そして中国の経済発展と同時に、2001年94千人、2002年110千人、2004年には130千人と年1万人のペースで現在は増加し



ている。(数値は法務省の外国人登録者数による)

この増加を支えているのが、中国からの留学生である。1993年頃にはまだ1万人程度だったものが、2000年45千人、2004年には91千人へと増加し、2000年以後の留学生全体の増加数の実に86%を占め、日本全体の留学生の70%は中国からとなっている。ちなみにこれに次いで多いのは韓国・朝鮮からの留学生で約16千人、全体の13%である。しかしながら、中国から海外への留学生数は2003年約52万人と言われ、その1割未満しか日本へは来ておらず、大半は欧米への留学と言われている。

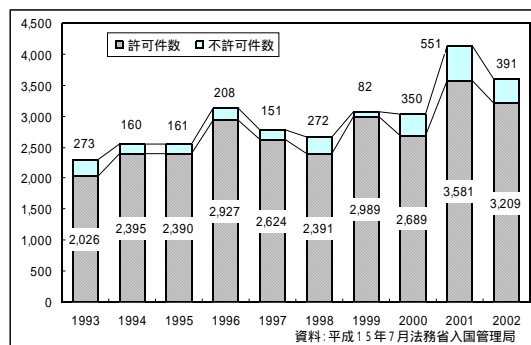
このように増加してきた中国の留学生は、一体どの程度日本で就職できているのだろうか。確かに、当日の会場の大部分は中国留学生とみられ、言葉は分からないが、友達おしで会話している声は中国語だった、と思う。

彼らが、日本で就職するためには、留学あるいは就学の在留資格の資格変更許可申請を出さなければならない。申請すれば9割程度は許可されているようだが、2001年に一時的に件数が伸びたものの、留学生数の増加ほど許可申請自体の数は伸びていないのは明らかである。

なぜ、就職者数が伸びないのだろうか。求人と求職の双方に原因はあることは間違いないだろうが、就職しない日本の若者とは事情が違わず。

ある調査をした時に聞いたのは、帰国して中国国内の企業に就職する際、日本での就職経験が採用へ有利に働くということだった。そういう意識の見え隠れする学生は、いずれは帰国して就職したいと考えているが、日本企業にとっては数年でも良いから働いて欲しいと思われるような優秀な人材もいる。

当日の面談では、理系と思われる留学生はあまり見かけなかった。日本人学生と同様に、理系の場合、彼らの就職は大学の教官を通じて決まるか、あるいは卒・修了後に帰国して国内企業に就職す



るなどの進路をとる学生が多いようだ。

また、北京や上海などの大都市では、若者の起業支援だけでなく、海外留学組と企業との面談も盛んに行われている。就職を希望する学生に対する昨年のある調査では、「外資系」の企業に就職するなら、日系企業ではなく、欧米系というのが2倍あったという結果もでていた。昨年、NPO事業で、中国訪問の際、現地の大学生に尋ねた時も同じようなことを言う学生がいたが、その理由に日本や企業のことをあまり知らないからとも言っていた。日本は今まで以上に情報を発信し、きちんと知らせるところから始めるべきと思った。

(山辺 真一)

就農準備校で野菜づくりとネットワークづくり

農業を始めると、いやでも天候や気温などが気になってしまう。今年は10月になっても30度を超えたり、雨が全然降らなかつたりと農業にとって散々な状況で、土がカラカラに乾いてしまっ、水やり作業にふうふういっている。

農業という産業は、実にメンテナンス(草取りや水やりなど)にコストがかかる。草取りは毎回30分×30人(畑は一反)なので、1人の場合、単純計算でざっと15時間だ。クワの使い方や作業スピードも、自分のイメージとはほど遠く、どのあたりで作業を止めると効率がいいのかなども皆目見当が着かない。“脳業者”には難しいことだらけである。

しかし、農作業お助けアイテムも実に多く存在する。草刈り機や耕耘機のようなものから、水まき作業を助けるターンローラー、種を植える穴あけローラーなんてものまである。それらを1セットにして“就農用ビギナーズパック”なんてものを販売したら売れないかな、などと考えながら、



ホースがウネをまたいで野菜をなぎ倒さないようにするターンローラー

草抜きをしている。さすがにそれだけのアイテムを揃えれば、農業ができる気分になれそうだが、同時に石油で農業をしている気分にもなりそう。ちなみに、機材を一通りそろえると100万ぐらいになる。種や肥料もけっこうな値段だ。真面目に農業をしようとする、と、どんどんお金がかかるようになっていく。一方で、先生が使っている道具には、ばあちゃんの代から使い続けているものもある。“ふるい”などは、どの世帯も同じものを使っていたので、焼き印で区別したそう。親から道具を受け継いだり、つながりがあるのはうらやましい。自分の親がどんな仕事をしているのかもよく知らなければ、見る機会もない。家族の縁は、いろんなところで切れている気がする。

準備校の生徒たちも、実はヨコのつながりはあまりない。みんな先生にダイレクトに質問するだけで、ヨコにいる人にはなかなか質問ができない。私自身もあんまり交流できていないのだが、ふとあるとき、「自然農の合宿」の案内を持って行くと、農作業をしているときに「実は私も自然農の会によく通っていて...」という人が話しかけてきたり、「天神方面に帰るなら送っていくよ」と車に乗せてくれる人が出てきたりするようになった。「自然農」というテーマは、参加者の興味の高いテーマだったようで、その情報発信をして以来“自然農に関心のある人”というふうに認知されているみたいだ。自分がどういうモチベーションを持っているか、をオープンにすると、周りの人も声をかけやすいのかもしれない。情報化社会のネットワークづくりのためには、自分のテーマを持って情報発信していくことが大事だということを改めて気づかされている。(本田 正明)

月心寺の精進料理

10月上旬、ため池の会(よかネット68号参照)の会合で滋賀県大津市月心寺の精進料理を食べに行く機会に誘っていただいた。月心寺を守っておられる村瀬明道尼様は、平成13年のNHK朝の連続テレビドラマ「ほんまもん」で料理人を目指す主人公の師匠“庵主様”のモデルとなった方である。以前糸乗から雑誌のインタビュー記事もらい、その人柄に触れてみたいという思いと1時間以上かけてごまを搗るなど3時間かけてつくられるという“ごま豆腐”を食べてみたかった。

禅寺だから相当な山奥にあるだろうと思ひ込ん

でいたが、お寺は京阪大谷駅から歩いて10分程度のところにある。寺の横を国道1号線と高速道路が平行していて、国道では猛スピードでトラックが走り抜けていく。月心寺はもともと、日本画家橋本関雪が東海道筋の「走井茶屋」跡地を別邸として購入した建物だそうだ。

当日は雨で薄暗かったのだが、寺の門前には月心寺と毛筆で書かれた行燈にぼっと暖かい火がともっていた。周囲の喧騒とは反対に、お寺の中は凜とした佇まいで、通された部屋から眺める庭の景色は、その色の深さと奥行きに吸い込まれそうだった。さらに渡り廊下の先に見える離れの部屋の雰囲気は、しっとりとした雨の風情とあわせて、息を飲むほどの美しさだった。

私達のグループの他には、3～5人の女性グループや夫婦づれなどで総勢30名程度が訪れていた。最初にごま豆腐が出される。何ともいえない優しい味に浸っていると、「たくさん食べてくださいね、栗は2つまでですよ」と次から次へと料理やお酒が運ばれてきた。料理は、隣の人と取り回しながらいただくのであるが、私は念願のごま豆腐をいただき、庵主様に会えた喜びに加え「味わいたい、写真撮りたい、お酒も飲みたい、隣の人に回すのを忘れてはならない」とすっかり舞い上がってしまった。心落ち着きながら精進料理を食べるという様子にはほど遠く、精進料理を半ばミナーで食べにきた自分を戒めるとともに、いつかこの寺のような佇まいの人になりたいと誓った秋の1日であった。

(愛甲 美帆)

韓国の仏教を、智異山松廣寺、実相寺、華嚴寺で感じる

智異山へ行ってきた。チリサンと叫んでいるのに、智異はチイではないかと気になっていた。地図にもガイド本にも異と書かれているのであるが、華嚴寺の山門を見て違いに気づいた。異は上が田で下が共になっているが、山門の字では田の中心の線が下まで届いている。里と共が一体化しているので上部を見ると里(リ)というわけだ。

智異山の松廣寺(ソングァンサ)に興味を持ったのは、以前に通度寺(トンドサ)の夕方の勤行を見た(聞いた)からである。それ以来韓国の禅寺に興味を持っている。今回は、テンプルステイが出来るということで、特に楽しみにしていた。期待に違わず夕方の太鼓で始まり、大鐘、木魚、雲板な



山門の智異山は、里になっている

どの音が巨大な山寺に響き、大雄殿に入って百人ほどの僧が唱える韓国の禅寺特有の抑揚を持ったお経を聞いた(寺全体では160人の僧侶がおられる)。音源の中にいるので、圧倒的な迫力である(これはCDになっていて、お土産にいただいたので、コピーをほしい方はご連絡を)。

そのあとで、すこし位が高いと思われる僧侶のお茶の接待と法話を、われわれ一行7人だけで聞いた。外国人にということもあったのか、戒律が厳しいというような公式の仏教法話であった。

「感じる」ということでは、韓国の寺は仏像には金泥が塗られ、柱・梁などにも極彩色が施されているのに、日本では剥げるにまかされているのが気になった。おそらくこれは仏教以前の「形式を重んじる文化」と日本の「成り行きに任せる文化」の違いなのかとも思った。おそらく親鸞の歎異抄に書かれているようなことは、仏教の内には入らないといわれそうだ。唯円が親鸞に「念仏を唱えたら浄土へいける = 浄土はずばらしいところだと教えて頂いていますので、念仏をした (= 浄土へいけることになった) のに、少しもうれしい気持ちが起こらないのですが、どういう訳でしょうか」と聞いたら、親鸞が「実は私もそうなんだ」と答える下りがあるが、韓国の寺ではとてもそんなことが言えるとは思えなかった。

韓国では、キリスト教も仏教もカトリック(正統的)なのだ。

翌日は3:00起床。3:30から太鼓で始まる勤行、大雄殿でお経、ついで私たちも座って手を合わせ 頭を床につけて拝礼し 立って手を合わせ というお勤めを108回続けた。途中で膝がふらふらし始めて、翌日の朝が心配になった。そのあと部屋に戻って座禅をつとめ、その後休憩



暗黒の世界で、少しの月明かりの下に行われているので写真は撮れないのだが、フラッシュをつけて撮影した人がいたので、それを借りた。中心の白い円が太鼓で、その前の人が太鼓を鳴らす若い僧である。

などを挟んで、食事、掃除（ほんのかたちだけ）、と8:00まで続いた。

もう一つ、書いておきたいことがある。実相寺にへ行く途中で「この辺りはパンソリのふるさとで、毎年全国大会があるのですよ」と聞かされて、「風の丘を越えて 西便制」(1993)という映画を思い出した。韓国文化の根底には“恨=ハン”があるといわれている。この映画はパンソリの旅芸人が、女の子と男の子の孤児を育て、パンソリを教え、“恨”の芸に到達しようとする物語である。ずっと以前にテレビで見かけ、韓国のことに出会うたびに思い出すものとなっている。車で移動中に、松廣寺の勤行の音に“既聴感”があったことを思い出していた。

気になったので、帰ってすぐに“風の丘を越えて”を見た。パンソリは1人の歌い手と、太鼓で即興の伴奏を入れる者との2人で成り立っている。この時の太鼓のリズムと、勤行で若い僧が交代しながら打ち鳴らす直径1.5メートルもある太鼓の音が私の中で反応していたのだ。

勤行ということでは、禅寺の太鼓のリズムの方が先であろうが、パンソリが流行った時代に、その影響を受けなかったとは言えないだろう。本当かどうか分からないが、仏教の音と民俗芸能が通い合っていると感じられた。（糸乗 貞喜）

韓国宿坊体験記

午前3時、「おはようございます」とオンドルの外からの声で目を覚ました。夜更かしをした時でしか起きていないような時間から松廣寺の一日は始まるので、時差ぼけしているような気分だ。

3年くらい前から寺や神社めぐりにはまってい

るので、今回のテンプルステイはかなり楽しみにしていた。2年前には一人高野山に登って金剛三昧院に泊まったのだが、4人部屋の和室でテレビ・冷房・漫画も完備、食事もお坊さんが部屋まで運んできてくれてなんとも驚いた。朝5時からのお勤め以外はりっぱな旅館だったのだが、今回は6畳ぐらいの部屋に5人で雑魚寝である。

暗闇の中を寝ぼけたまま本堂に向かうと、お勤め開始を知らせる太鼓の音が聞こえてくる。本堂の前には高さ2mほどある巨大な太鼓があり、それを4人のお坊さんが代わる代わるたたく。太鼓の上を縦横無尽に動く叩き方は初めて見るものだ。本堂に入るとすでにお坊さんでいっぱい。鐘の合図で一斉にお経が始まったのだが、旋律があるので合唱のように聞こえる。高野山のお経では、お坊さんがまるでダンスのように激しく飛び回っていたので、国も宗派も違えばお経もだいぶ違うなど思いながら拝んだ。修行なので礼拝も真面目に108回(煩惱の数)行った。スクワット運動のような動きなので、日頃の運動不足もあり、息切れが激しい。隣にいた韓国人のおばちゃんといい勝負だ。その後、座禅、食事、清掃と続き、明るくなる空を見ながら、こんなに朝を長く感じるのはコンビニの夜勤以来だな、なんてことを考えた。

韓国の寺は肉食と酒は厳禁なので、般若湯と称して持ち込んだウイスキーも飲めずじまいだった。朝10時にお寺を出発したワゴン車の中で、誰かが「韓国の仏教は“宗教”で、日本の仏教は“職業”だ」と言ったのを思い出したのだが、私は職業仏教の方が柔軟でいいなと思いつつ眠りについた。

（本田 正明）

よかネット No. 78 2005.11

（編集・発行）

(株)よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号

福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

http://www.yokanet.com

mail:info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-6942-5732

東京事務所

TEL 042-501-2531

名古屋事務所

TEL 052-202-1411

(株)地域計画・名古屋